

第1章 1989～1991年度京都大学構内遺跡調査の概要

小野山節 清水芳裕 五十川伸矢

1 調査の経過

京都大学吉田キャンパスはそのほぼ全域が周知の遺跡となっているため、敷地内の建物新営やその他掘削工事のさいには、既知の遺跡との関係や過去の調査結果にもとづいて、予定地内の埋蔵文化財の調査を発掘、試掘、立合に分けて実施している。

1989～1991年度には以下の発掘調査2件、試掘調査1件、立合調査6件、資料整理2件を実施した。

発掘調査	医学部・遺伝子実験施設研究棟新営予定地（病院構内AE13区）	（第3章，図版1-198）
	分子生物科学実験研究棟新営予定地（病院構内AG14区）	（整理中，図版1-200）
試掘調査	理学部動・植物学科校舎新営（北部構内BA28区）	（第1章，図版1-201）
立合調査	理学部化学教室別館模様替工事（本部構内AY23区）	（図版1-199）
	病院地区基幹整備 教養部構内工事（教養部構内AR21区）	（第1章，図版1-202）
	病院地区ゲート廻り等整備工事（病院構内AE16区）	（図版1-203）
	胸部疾患研究所情報通信設備工事（病院構内AF12区）	（図版1-204）
	農学部農業研究所施設等通信設備取設工事（北部構内BG35区）	（図版1-205）
	農学部附属植物生殖質研究施設新営（京都府向日市）	（表2-206）
資料整理	附属病院中央診療棟・臨床研究棟新営予定地（病院構内AH19区）	（第2章，図版1-191）
	ウイルス研究所実験研究棟新営予定地（病院構内AE12区）	（第3章，図版1-192）

なお京都大学構内での埋蔵文化財の発掘調査は、1976年以後、京都大学構内遺跡調査会を主体に実施してきたが、1992年3月をもって調査会は解散することになった。その間埋蔵文化財研究センターの指導のもとに発掘調査を実施し、その成果の報告と出版に関する事業を当センターがおこなうという、一連の関係で調査がすすめられてきた。この解散にともなって、1992年4月以降は発掘・整理調査を含めて、埋蔵文化財研究センターが実施することになり、現在に至っている。

2 調査の成果

前節であげた1989～1991年度の調査から、吉田キャンパス内の遺跡についてあらたに得られた知見をまとめて略述する。なお、AH19区、AE12・AE13区の発掘調査について

は、第2章と第3章で、BA28区の試掘調査、AR21区の立合調査については、本章第3・4節で詳述する。

病院構内AH19区の調査では、先史時代から近世にわたっていくつかの新たな情報が得られた。まず、縄文中・後期の土器が白川系堆積物中に含まれており、聖護院遺跡の広がりがこの付近にまで及んでいることが明らかになった。また、奈良時代の住居跡と考えられる遺構があり、北西約100mの地点（図版1-154）でも、7世紀後半から8世紀初めの土師器や須恵器を出土する遺構が検出され、平安京造営以前のこの一帯の土地利用に関する資料を加えるものとなった。さらに、12世紀中葉ごろの時期の土師器を多量に含む土坑では、燈明皿として使用された痕跡を残すものが多く、また墨書をもつ土師器も含まれており、この調査区近辺に比定されている福勝院の祭祀に関係する遺構の可能性も高い。その他近世の多数の遺構が検出されており、この時期の聖護院村、吉田村の景観の復原に資するものとなった。

病院構内AE12・AE13区の調査では、中世の遺物が少量出土するものの、この時期の遺構は検出されていない。北東へ約50mの位置にあたる医療技術短期大学の校舎新営予定地の調査（図版1-39）では、平安中期の護岸跡が検出されており、平安時代から中世の時代を通じて徐々に開発の手が加えられた一帯であったことがわかる。近世の遺構では、井戸、野壺、柵列など、畑作に関係する遺構とともに、この時期の遺物が多数出土することから、中世以後の開発が近世に至ってはほぼ安定し、近世聖護院村の周辺にひろがる畑地として機能したことが明らかになった。

3 北部構内BA28区の試掘調査

本調査は理学部動・植物学科校舎新営の計画にともない、予定敷地内の試掘調査をおこなったものである（201地点）。北白川追分町遺跡の西南端にあたり、周辺では弥生中期の方形周溝墓と鎌倉初期の火葬塚（54地点）、古代の建物跡や近世の瓦溜（109地点）などが検出されている。そのほか農学部と理学部本館の新営工事のさいの発掘および183地点の試掘調査などから、弥生時代以前の旧地形を復原すると、本調査区は東北方の微高地から南西へ急激に下がった低地、あるいは旧河川の谷部に想定される位置にあたる（図1）。

予定地内に2m×2mの試掘坑を計5ヶ所設けて、層序と出土遺物の確認をおこなった。各試掘坑の間で若干の差はあるが、全体に次のような点が確認できた（図2）。表土下に、上から近世の遺物を含み耕作土と思われる灰褐色土、中世の遺物を少量出土する茶

褐色土となる。さらに、黄褐色砂礫あるいは一部の試掘坑では黄褐色粘質土とともに、全試掘坑で共通して厚い黄色砂がつづく。この黄色砂層は、従来の調査から弥生前期末～中期初頭に堆積した土石流にともなうものであることが明らかになっており、その上面は東北のTP2では地表下約1.5m、西南端のTP3で地表下約2mである。いずれの試掘坑でも黄色砂層の下面の確認はできなかったが、この上面の傾斜から全体の旧地形が東北から南西へ向かって緩やかにさがっていた状況がわかる。この砂層中から縄文土器が出土しており、縄文時代の包含層がさらに下層に存在することが予測できた。また慶応4（1868）年刊の『改正京町御絵図細見大成』には、この予定地付近に土州屋敷が描かれており、これに関する遺構にも留意しておく必要がある。

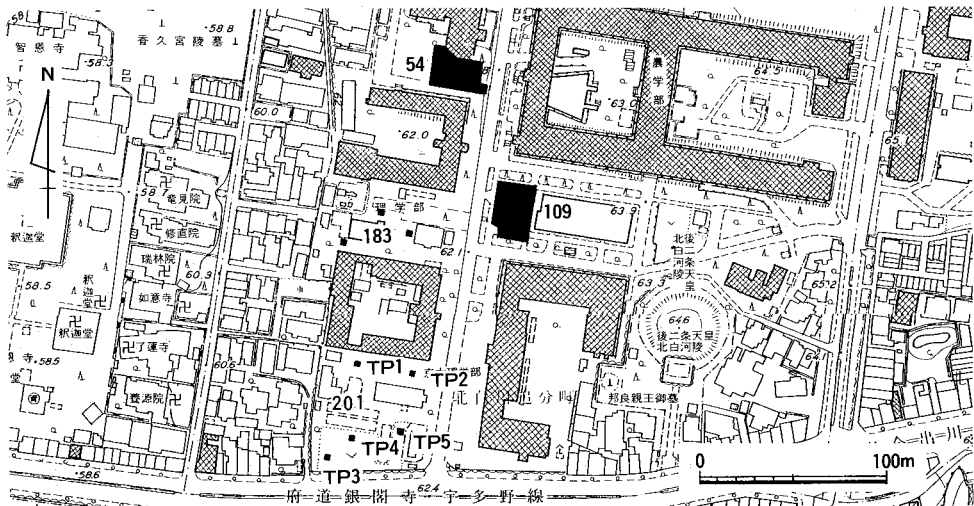


図1 試掘調査の位置と周辺の調査区 縮尺 1/4000

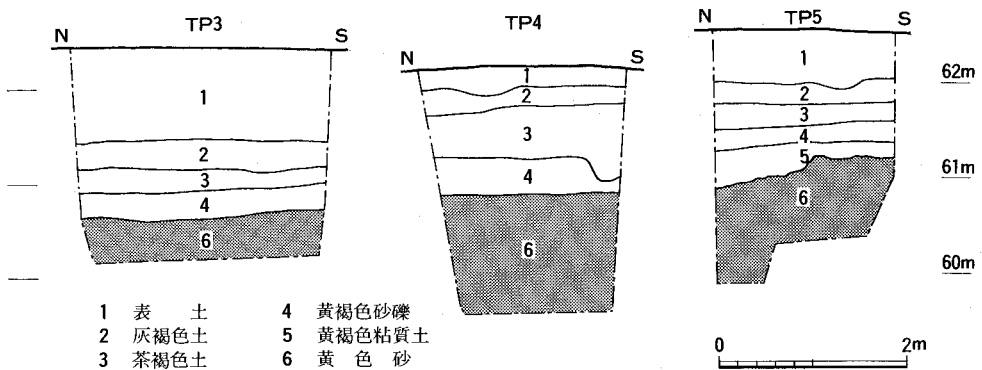


図2 TP3・TP4・TP5東壁の層位 縮尺 1/80

4 教養部構内AR21区の立合調査

教養部構内西北域の吉田グラウンド西縁・北縁の電気管理設にともなう立合調査で、以下のような遺構を検出した（図版1-202）。立合調査地の南に隣接する111地点では、1981年度の発掘調査によって、弥生時代の水路、古墳時代中期の方墳、奈良時代の建物、平安中期の梵鐘鑄造遺構、中世の邸宅跡と墓地、近世の道路と沿道に広がる畑地の溝など、多様な遺構が発見されており〔五十川・飛野84〕、これらの延長部分と考えられる道路遺構や包含層が、吉田グラウンド南縁の立合調査ですでに確認されていた。また、吉田グラウンドの西側の東大路通りや東側の教養部東北域とは、段差が明瞭にみとめられるが、その表土の下には中世の半ばごろの包含層がそれぞれほぼ水平に堆積していることから、グラウンドの平坦な地形も京都大学設置以降の造成によるものではなく、中世には形成されていたことが判明している（図3）。

今回、立合調査をおこなった地点の基本的な層位を図4に示す。表土下には、近世の耕作土とみられる灰黒色土（第2層）、13世紀～14世紀の遺物を含む茶褐色土（第3層）がほぼ水平に堆積している。次に黒褐色土などを介して、弥生時代の前期末～中期初頭ごろに堆積した黄色砂（第7層）が全面に分布する。赤褐色粘質土（第8層）は111地点で検出したように弥生前期ごろに形成されたものと考えられる。黄灰色シルト（第9層）は教養部構内から医学部構内にかけて堆積しており、後述のように土取りの対象となった。その下には、茶褐色あるいは黄白色の砂（第10・11層）がみられる。

F地点では、黄色砂の上面で掘形が一边約2.5mの隅丸方形の土坑を検出した。立合調査のため、底まで掘削していないが、壁はほぼ垂直であり、中世の井戸と推定できる。F地点とE地点の間では、SK2、SK1などの小規模な土器溜のほか、近世の土取りの跡（図3斜線部分）を検出した。採取されたのは黄灰色シルトとみられ、こうした土取り跡の遺構は、医学部構内において中世半ばから近世初頭のものが検出されており〔清水・吉野81、五十川86、浜崎90〕、また、病院構内の北辺で近世の半ばごろのものが発見されている〔五十川ほか89〕。とくに病院構内の154・155地点では、大規模に黄灰色シルトやさらに下層の黒褐色粘質土が採取されており、これらは、焼物の素地として利用された可能性が高い。中世の土取り跡は不整形を示すのに対して、近世のものでは方形の掘削単位が明瞭にみられ、田畑の畔をのこして大規模に採取しているところに特徴があり、近世には土が商品として組織的に採取されたことを物語っている〔五十川91〕。

教養部構内 AR21 区の立合調査

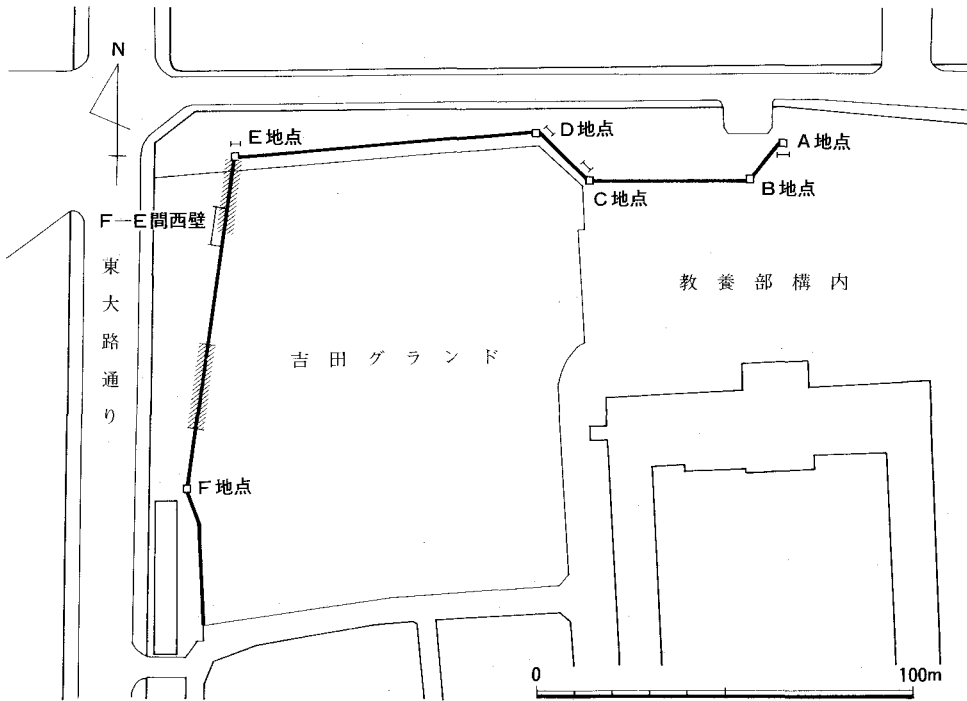


図3 立合調査の位置 縮尺 1/2000

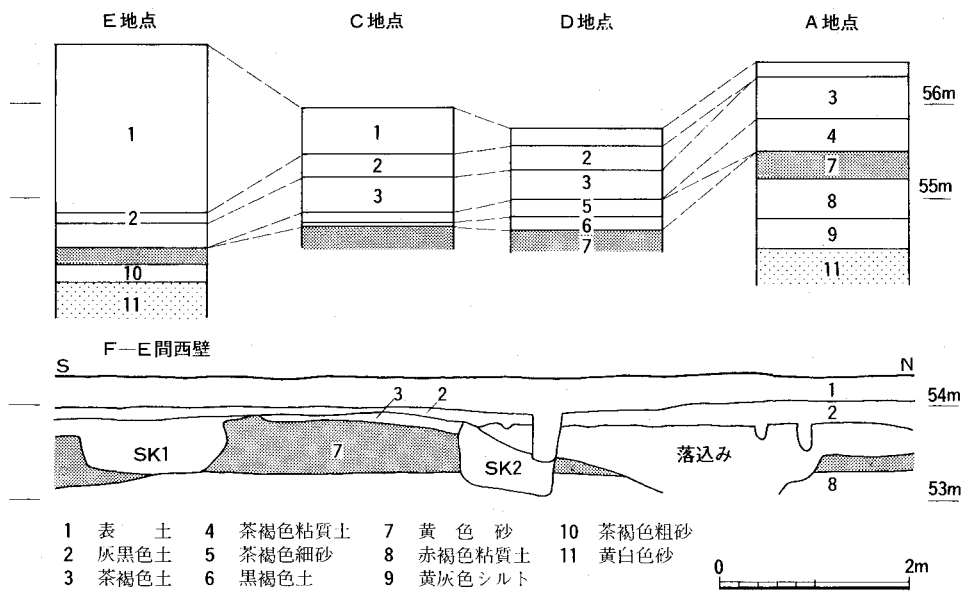


図4 E地点・C地点・D地点・A地点・F-E間の層位 縮尺 1/80

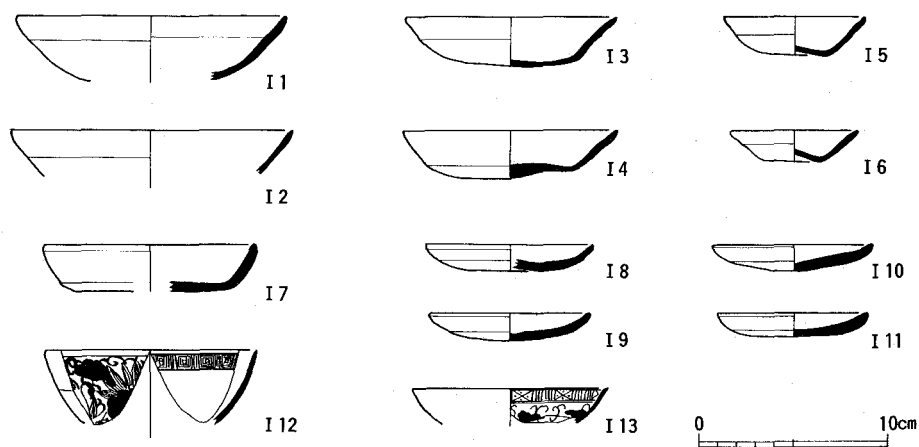


図5 SK2出土遺物（I1～I6土師器）、SK1出土遺物（I7～I11土師器）、
黒灰色土出土遺物（I12・I13染付）

土坑SK1・SK2，黒灰色土の出土遺物を図5に示す。I1～I11は土師器。I1・I2は灰白色を呈する碗，それぞれE₂類，E₁類の口縁形態を示す。I3・I4は赤褐色を呈する皿，E₁類の口縁をもつ。I5・I6は灰白色の凹底小碗。I7～I11は赤褐色の皿，D₅類の口縁をもつ。これらは，ほぼ13世紀中葉ごろから14世紀前葉ごろの資料である。I12・I13は染付。近世の後半のものと推定され，黒灰色土は，近世後半の畑地にもなうものと推定される。

このように，吉田グランド一帯にも，中世前半の邸宅もしくは集落の遺跡が広がっている可能性が高い。また，近世には田畑となっているが，土の採取が大規模におこなわれていたことも判明した。